

豊かな水に育まれた坂元棚田の価値と可能性

宮崎大学農学部森林緑地環境科学科
准教授 竹下 伸一

1. 幾何学棚田誕生秘話

大正14年(1925年)設計。昭和3年(1928年)着工。昭和8年完成。中心部に長方形に整えられた5a区画のほ場が並ぶ傾斜地水田。

明治から大正末期にかけてのわが国の耕地整理の考え方が反映されたもの。特に、明治38年に東京帝国大学農科大学農学第二講座分担助教授・上野英三郎が、若干34歳で著した本「耕地整理講義」の影響が濃い。

- 特徴1. 従来の狭小不整形な農地を区画拡大し、なおかつ矩形化すること
- 特徴2. 牛馬の通行を前提とした農道を配置し、できる限り接続させること
- 特徴3. 畦畔をできるだけ小さくして潰れ地を最小にすること
- 特徴4. 従来の田越し灌漑を廃止し、用排水状況の改善を図ること

戦後、わが国農業の労働生産性の悪さの改善が急務となり、農業機械の導入、自動車の利用、高度な農業用水管理が求められ、農業の近代化が進んだ。

明治・大正から昭和初期にかけての、わが国の耕地整理のコンセプト、上野英三郎が提示した当時の近代化農業の姿がそのままの形で残った坂元棚田。農地でありながら近代化遺産としての側面をも持つ貴重な文化遺産である。

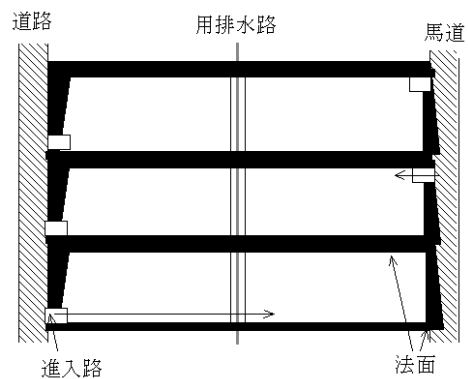
2. 棚田を支える水

坂元棚田で稲作をするには、比較的多くの水を必要とする。それを支えるのが宮崎の豊かな雨。そしてそれを受け止める器としての飢肥杉の山。溪流の水を棚田まで運ぶ1.6kmにも及ぶ水路。この水路こそが棚田を支える生命線。

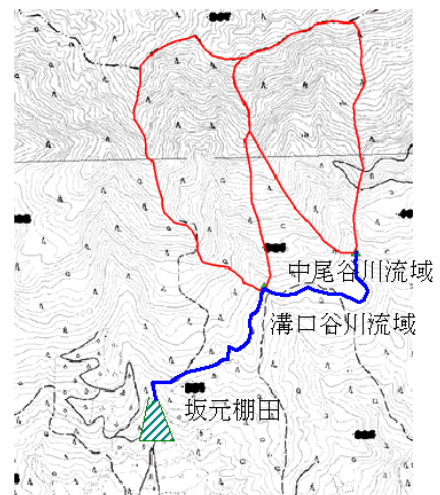
3. 価値の再発見と可能性

気温が低い、水が冷たいなど何かと評価の低かった棚田産の米。しかし、近年その品質を見直す動きが全国的に広がりつつある。特に、温暖化の影響で、お米の品質が低下しつつある中、棚田はその影響を受けにくい産地として評価されつつある。

景観としての棚田だけではなく、本来の姿である米作りの場としての棚田を盛り上げていくことこそが、真の保全へと繋がっていく。



坂元棚田中央部の長方形区画



棚田と流域、そして水路